

## 研究報告

## 社会的思考力を高めるためのノート指導

桑折町立醸芳小学校教諭 古内利勝

## 1 研究の趣旨

## (1) 研究の動機とねらい

「書く」ことの学習は、子どもが、自分の考えを深めていく上で必要であるばかりでなく、「話し合い」を進めていく上で欠くことのできない機能を持っているが、社会科の学習にどう生かしていったらよいのか、確たるものを持ち得ないまま、今日までできてしまった。

以前、ノート指導をとおして、社会科における学習方法訓練のあり方にとり組んだことがあった。その結果、自主的な学習へのとり組みは見られるようになったものの、ノートづくりに時間がかかりすぎる。個々の学習は高まってきたが、集団思考の場で、ノートしたことが十分生かされていない、教師側からは、ノート点検に要する時間が十分とれない。能力差の広がりに対する配慮が十分なされなかった、などの問題が出てきた。しかし、これらの問題が解決されないまま中断してしまっただ。

「書く」という機能が、思考を高める上で有効なことは、今さら述べるまでもないが、子どもの実態として、表面的で、追求心が浅く、書くことをきらう子が多いことも事実である。しかし、果たしてこのまま子どもの実態としてよいものであるのか。教師側の責任を問題にしなくてはならないのではないだろうか、と最近強く感じるようになった。そこで再び、子どもたちにとって不可欠なノート、そのノートづくりの指導をとおして、社会科の学習の目標である思考力、判断力の育成にとり組んでみようと考えた。

## (2) 問題点

## ① 学力テストから

- ア 平均 50.41 標準偏差 6.97 全国水準との差が認められず、ほぼ、全国水準なみの力を示している。(教研式 S56.6 実施)
- イ 社会的事象のもつ意味をとらえたり、関

連づけて解決したりする問題の正答率が低い。

ウ 用語の理解が十分でない。

## ② 日頃の社会科の学習から

- ア 授業中の発言は、他教科に比べて少なく一部の児童に限られている。
- イ ノートは、板書事項を写すにとどまり、ノートを工夫して使っている児童はいない。
- ウ 書くことに積極的でない児童が多い。

## (3) 原因

- ① 授業の中で、子どもたちがひとりで学習する学習の仕方を、もっと重視していかなければならないし、集団の中で発表され、討論される学習集団の育成に力を入れていかなければならないが、それらが十分でなかった。
- ② 知識の習得をあせるあまり、子ども自ら学ぶ態度の育成が十分でなかった。
- ③ 自主的な学習を支えるものとしてのノート指導を十分に行ってこなかった。特に、ノートは、自分の考えがグループや学級の話し合いにどのように関連し、どのようにとり上げられ、そのことによって自分がどのように変わったかの記録であること、子どもたちのノートは、個性的でなければならないことを十分ふまえない。したがって、ノート指導のポイントを記録としての機能だけでなく、特に、思考力育成としての機能を重視していきたいと考え、この研究テーマをとり上げた。

## 2 仮説

## (1) 仮説のための理論

- ① 自主的な学習態度育成のためのノート指導
  - ア 何をノートさせるか、ノートする内容を明らかにする。
  - イ 考えたこと、調べたこと、わからないこと、覚えたいことを、どうノートするかの指導を十分にすること。